

ニューヨークタイムズのコラムに見られる “parallelism”

河 上 邦 雄*

Parallelism in Columns of the *New York Times*

Kunio KAWAKAMI

This paper deals with the use of parallelism in columns of the New York Times as an important category of the rhetoric of repetition. A study of this kind constitutes one step in compiling a textbook on writing for college students and adults with a more advanced knowledge of English.

The examples of parallelism included in this study are taken from essays by three renowned columnists of the New York Times which appeared in the newspaper issued between April 1 and May 31, 1995. These examples have been classified into groups according to form and grammatical structures. The use of this writing technique has then been discussed with a view to its future use as a model for writing English.

Even though sixteen essays with excellent examples of parallelism have been closely analyzed, because of space limitation, examples from only three articles, one each columnist, have been presented in this paper as samples.

1. まえがき

日本人にとって、英語の文章を書く能力の望ましい目標は、国際社会において高度な知識や情報の交換、意見や思想の伝達のために必要な論理的で説得力のある文章が書けることであろう。

このような文章で、もっとも大切なことは、述べている事柄、事実が正確であること、表現がやさしく明快であること、そして論旨が妥当であること、などである。

しかし、文章の書き手も、それを受け取る読み手も人間である以上、その伝達と受容の間には、かならず感情の要素が入ってくる。同じ内容の文章でも、読み手により受け入れられやすく、より訴える力をもつようにするためには、さらに特別の工夫が必要になってくる。

古来、それらは rhetoric として研究され、弁論術や文章論として発展し実践されてきた。しかしそれらが後に、あまりに細緻、複雑な技巧に走り、情報や意思の正確な伝達という、本来の、言葉による communication の目的を阻害をする恐れがあるということ、またあまりに装飾的な

* 教養部

文章が内容の信憑性、書き手の誠実さに対して疑わしさを感じさせるとして、近年は敬遠される傾向があった。しかし、現代においても rhetoric の基本的なもの、たとえば ” くりかえし ” の手法や、” 比喩 ” の効果的な利用は、文章効果を挙げるために有用なものとして行われている。

ここ数年、writing のモデル教材の一つとして The New York Times の editorial や column を利用してきた。そして、それらを有効に利用し、指導の効果をあげるために、それらの文章に見られる言語使用上の工夫、特徴、すなわち diction, style, rhetoric に関心をもち調査研究を行ってきた。今回は、文章中の一定の箇所を強調したり、印象を深めるための手段としての ” くりかえし ” (repetition) の技法の一つである parallelism を中心に調査研究を行った。本編では、そのうち、New York Times の三人の著名な columnist の column を対象にこの技法の用例を分析検討した結果を報告したい。

II. Parallelism

文章のある部分を強調し、印象を強くする手段としての ” くりかえし ” の技法のなかで、語単位のものでは、連続する単語の語頭の音をそろえる alliteration や、同一文章の中で、同じ keyword を何度も繰り返す、せまい意味で repetition と呼ばれているものがよく知られている。しかし、これらについてはすでに報告している。(福井工業大学研究紀要第23号, 1994) そこで、今回は、句や節または文の単位での反復、並置という形で行われる ” くりかえし ” (その多くは、文法的に同一または類似の構造をもち、広い意味で parallelism と呼ばれる) に対象を絞って検討、分析を行っている。

Parallelism は修辞学上、並行体とか対句法と呼ばれているもので、類似の思想の反復あるいは相反する事柄の対置、対照によって、それらを総合し、意味や印象を強めることを狙いとする文章技法である。

Parallelism の用法の分類：

1) 内容の面から分類すると、上の定義に示されているように二つに大別される。

(1) 類義的並行法 (synonymous parallelism)

Ex. In her sleep, Lily Margulels still hears /the dogs barking in the night and /the German soldiers shouting "Dirty Jew." (Synonymous: Holocaust Survivors; May 2, 1995)

(2) 対立的並行法 (antithetic parallelism)

Ex. They are the guardians of memories /too terrible to describe and /too important not to. (Antithetic: Ibid.)

2) 形態の上から分類すると次の5種類になる。

- A) 全く同じ句、節、文のくりかえしになっているもの。
(このような完全な形での parallelism の例は今回調査のコラムの中では一例も見あたらない。しかし一般にスピーチでは、かなりひんばんに用いられているものである。例えば Winston Churchill や Martin Luther King, Jr. のスピーチ等)
- B) 同じ語、または語句を先頭にもつ、句や、節、文のくりかえしになっているもの。これはまた修辞学で anaphora と呼ばれる。
- C) 同じ語、または語句を、句や節、文の中間にもつもののくりかえしになっているもの。
- D) 同じ語、または語句を、句や節、文の末尾にもつもののくりかえしになっているもの。これはまた修辞学で epiphora と呼ばれる。
- E) 同じ語、または語句のくりかえしはないが、文章構造や文法上の機能の点で同一または類似であり、それぞれの意味、内容が同種または関連、対照などの関係にある句や、節、文のくりかえしになっているもの。

III. 研究の対象と方法

A. 対象：

本研究は New York Times の3人の columnist の column で、1995年の4月と5月に N.Y.T. 紙上に掲載されたものを研究対象としている。3人は、William Safire, A.M. Rosenthal そして Anthony Lewis である。N.Y.T. 紙上で column を書いている columnist は他にも何人かいる。上の3人を選んだ理由は、Safire, Rosenthal の両名は、掲載される本数が比較的多いこと。さらに Safire は別に、N.Y.T. 紙上に “On Language” という essay を連載していて現代のアメリカにおける言語使用のありかたにことのほか関心を持っているジャーナリストであること。彼はまたニクソン元大統領の speech writer であった経歴も持つ。Rosenthal はインドやモスクワ特派員を経て最近まで10年ほど N.Y.T. 紙の編集長を務めていたベテランであること。

Anthony Lewis は掲載される本数は少なくなったが、最長老の記者であり、リベラル派の代表格で格調高い文章で知られていて、他の二人とは対照的である点から選んだ。長くロンドンに勤務し支局長を務めたこともある。また若い頃、Churchill 番記者だった関係で、この大政治家に会いがられ、Churchill についての著作もある。なお Safire はタカ派の right wing と見なされ、Rosenthal は中道やや右寄りである。

調査対象となった column は次の通りである。

William Safire:

1 Gambling Fever (April 10)

A. M. Rosenthal:

1 Cover-Up Chronology (April 4)

- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 2 Iraq's Ton of Germs (April 13) | 2 Dole in Bosnia (April 18) |
| 3 The 25% Solution (April 20) | 3 Clinton Does His Duty (April 28) |
| 4 The Paranoid Style (April 27) | 4 Naming the Enemy (May 9) |
| 5 Of Horses and Candidates (May 4) | 5 Voyage of the Damned (May 29) |
| 6 Using Our Brains (May 18) | 6 Why Only Bosnia? (May 31) |
| 7 Not Just Memories (May 29) | |

Anthony Lweis:

- 1 Israel: A New Voice (April 10)
- 2 Farewell to Hollywood (May 12)
- 3 Friends of Fraud (May 22)

B. 方法:

- 1) 各 column 毎に, 用いられている parallelism の用例を拾い, column のタイトル別に整理し, ついでそれらを次の三つの観点から分類し, それぞれに label を付ける.
 - a) 句, 節, 文, いずれの単位での "くりかえし" であるか,
 - b) synonymous parallelism, antithetic parallelism のいずれの用法であるか,
 - c) 第2章ですでに触れた, 形式から見た分類の A) ないし E) のいずれに属するか.
- 2) 個々の column から収集された用例の全体を, 句, 節, 文の種類別に分類し, グループにまとめた. こうすることによって, 種類毎の使用頻度を調べやすくなった. また句や節の単位のくりかえしの場合に見られる一定のパターンを明らかにすることが容易になった. 紙数の限られた本稿では, 上記の方法によって作成した二種類の資料集の全部をそのまま載せることは不可能である. 本研究報告ではその一部, それぞれの columnist のリストから1編づつを代表としてとりあげ, それらの中で parallelism がどのように用いられているかを例示することにする.
なお最初の, 特異なほど頻繁な parallelism の用例が見られる, Safire の column については一つの典型として, より詳細に分析, 説明したい.

IV. 代表 column における用例の分析

[WILLIAM SAFIRE: 6. NOT JUST MEMORIES (May 29)]

このコラムは五月二十九日に Hawaii で行われた Memorial Day の記念式典取材した時に書かれた. Safire は Memorial Day がもっぱら戦死者の功績をたたえ, その霊を弔う日として式典が行われたのに対して, 来る九月二日に予定されている, V-J (Victory over Japan) Day は単

に死者を弔い veteran の勲功を讃える記念日にとどめず、なぜ戦争が起こったのかまたどのように自由が守られたのかを、若い世代の人々に思い起こさせ、理解させる日にしなければならないと主張している。

*S-6-1 (3 phrases - synonymous - B) + (3 phrases - synonymous - E)

V-J+50 years is a time /to re-experience, /to understand and /to profit from the greatest event of this century; the victory of the free world over the forces of/ Germany's Naziism, / Italy's Fascism and / Japan's militaristic imperialism.

Note:ここで用いられている label “S-6-1” はこの例が Safire の No.6 の column の中で見出される 1 番目の parallelism の例であることを示している。括弧内の label “3 phrases” はこの例が phrase 3 個の並行体であることを、“synonymous” は意味内容において類義的並行体であることを、そして “B” はこの例が、形式上の分類において並行体の先頭において同一語句の繰り返しが見られる type の parallelism であることを示す。

この例を観察すると、前半では time を形容する不定詞句 3 個が、後半では forces の同格を表す名詞句が 3 個並置されている。

* S-6-2 (2 sentences - synonymous - C)

/Unfortunately, the moment is being lost again by a failure of vision.

/The three-day event in Hawaii is being planned by the Defense Department.

この 2 文がどうして synonymous parallelism なのかわかるかもしれないが、前者は、見識の欠除によって V-J Day の意義が失われているという筆者の批判の表明であり、後者は、その理由として、この日が国防省主導で単なる軍事的勝利の記念日としてしか意義づけられていないと言っているのである。従ってこの 2 文は、形式上も意味内容からも parallel になっていると言える。

* S-6-3 (3 clauses - synonymous - C)

/ Ceremonies will be held at the National Memorial Cemetery of the Pacific;

/ 20,000 veterans and armed service members will parade;

/ salutes will be offered to uniformed representatives of countries involved in or touched by the war.

これらの 3 個の節は、厳密に同じ文構造をとっているわけではない。たしかに、第 1、第 3 の文の動詞型が未来時制の受動態であるのに対し、第 2 の文だけは、未来時制の能動態になっている。もし、この文も、“Parades will be held ……” という風にでもなっていれば、これら三者の parallelism 関係はよりはっきりするであろう。ただ、3 つの句や文が並列に置かれている場合は、たいていそのうちの 하나가変形になっている。これは、筆者が一方でくりかえし

の効果を求めながら、他方、機械的な単調さは避けたいという意図からであろう。

* S-6-4 (2 sentences - synonymous - C) & (2 phrases - antithetic - C)

/ The centerpiece will be the speech of the president of the United States aboard the aircraft carrier Carl Vinson, with the Arizona in the background.

/ Bill Clinton will stand in the spotlight during three days of military pageantry, with no other world leaders present.

文全体では synonymous の様であるが、with で始まる付帯状況をしめす副詞句の部分では antithetic になり筆者の皮肉と批判がこめられている。原文でも後者はイタリックで示されている。

* S-6-5 (3 clauses - synonymous- E)

/ The decision not to invite the president of the Philippines (Bataan, Corregidor) is dismaying;

/ the absence of Britain's prime minister and the leaders of Commonwealth and other nations that helped win the war is an affront to history;

/ the failure to invite the prime minister of Japan wastes an opportunity for reconciliation.

第9 paragraph に見られるこの parallelism では、当然招かねばならない世界のリーダーを招かないことによって、この記念式典の歴史的意義が失われたということを、招かれなかった三人の世界のリーダーの場合を例に挙げる三つの clause の並列になっている。これらは文法的組成において完全に相似ではない。しかしながら、三者は、意味内容の共通性はもちろん、文の構造も、それぞれの構成要素が、微妙な変化を含みながら、互いに密接に対応しあっている。

なお第一と第二の clause では、主語の名詞と、述部の be 動詞のあとにくる補語の語頭の音を同一にするなど、細部にまで技巧が及んでいる。

The decisionis dismaying.

The absenceis an affront.

* S-6-6 (2 clauses - antithetic- C)

/ World war II was not fought to fight a war;

/ it was fought to achieve a great moral purpose.

この二つの clause では、前者の paradoxical な判断と、それに対する antithese として後者が対応するという parallelism になっている。

* S-6-7 (2 sentences - synonymous - C)

/ Americans should take unabashed pride now // in the democracy in the Philippines,...
// at the new freedom in Taiwan; // at the statehood of Hawaii,.....
/(And) the United States should seize this opportunity to tell the world // how
proud we are.....and// how Japanese made....

第14 paragraph に見られるこの例では、二つの節の冒頭の語句が ほとんど同じ内容を表す同義語 'Americans' と 'the United States' によって並置されている。これらは両者をそのいずれかに統一して、同一の主語にしても、特別支障はない。'Parallelism' の点ではより完全になる。しかし Safire は機械的なくりかえしを避け、変化をもたせることに重点を置いたのである。

なおこの例の第一の節では、Americans should take pride now に続く副詞句が3個並列されている。第二節では、動詞 tell の二つの目的節がいずれも how で始まっている。

* S-6-8 (2 clauses - synonymous - B)

/ Sure, they took advantage of our defense umbrella.....;
/ sure, they closed their markets and invited a trade war.

* S-6-9 (3 phrases - synonymous - E) + (2 sentences - synonymous - B)

V-J+50 is the day / to suspend the sniping and / (to) join in wonderment at how....
And / to point to the day when....

さらにこの文は全体として、S-6-1 の文と parallelism になっており、anaphora のケースでもある。前述のように、500語弱の column の中にこれほど豊富な parallelism の例を見るのは希なことである。たいていの column では2ないし3例である。Safire は確かに他の二人よりは多用する傾向があるがこれは例外的である。しかし、parallelism の用法のモデルとしては大いに役立つ。

[A.M. ROSENTHAL: 3. CLINTON DOES HIS DUTY (April 28)]

この論文は、オクラホマの連邦ビル爆破事件のあと、内外のテロ破壊活動組織を探るために、電話盗聴などをふくめたより広範で、強力な捜査権を FBI に付与する法案を議会に提出しようとしたクリントン大統領が、各界から、ベトナム戦争時代の FBI による思想統制、人権侵害の再来を招くとして批判されされている中で、Rosenthal が大統領支持の論陣を張ったものである。

* R-3-1 (3 phrases - synonymous - E)

Mr. Clinton is accused by politicians, journalists and lobbyists who want him out of office of /misusing his powers /manipulating the minds and emotions of the American people and /smearing his opponents with the blood of Oklahoma.

* R-3-2 (2 sentences - synonymous - B)

/If journalists commit libel, they can be held liable in the courts.

/If Americans object to advertisements, TV programs, movies or news coverage, they have the right to the economic protest of boycott.

この二つの文の parallelism では、それぞれの文の、主節、従節ともに同一語のくりかえしで始まる anaphora になっている。

* R-3-3 (2 phrases - antithetic - B)

The First Amendment protects Americans /from punitive action by government, not /from the contempt or rejection of their countrymen.

* R-3-4 (3 phrases - synonymous - B)

But /in print, /on the air and /in Congress, they whined, the innocents.

* R-3-5 (2 sentences - synonymous - B)

/Prove it, they said, prove that Americans tromping around in camouflage, with ugly weapons and minds, inspired the bombers.

/Prove that what we spew out ourselves had a thing to do with shaping them.

* R-3-6 (2 sentences - synonymous - B)

/They include the intellectuals of the movie business who make big money portraying Americans as viciously as any militiaman.....

/They include lobbyists who cry out that if antiterrorism is tightened.....

因みにこの column では、keyword の "hate"(hatred, hated を含め) が8回, "paranoia" が4回、くりかえし使われている。

[ANTHONY LEWIS: 2. FAREWELL TO HOLLYWOOD (May 12)]

レーガン時代の8年間、政府は大幅な減税を行う一方、大盤振る舞いの財政支出で経済は潤い、国民は豊かな生活を享受した。しかしそれは止めどもない借金財政の上に成り立っていた、テクニカラーのハリウッド映画のような一時の幻影の世界にすぎなかった。今年五月、上院予算委員長の共和党議員 Domenici 氏は医療保険や社会福祉関係を中心に、大幅な予算削減を盛り込んだ緊縮財政案を提出した。Columnist の Lewis はこの essay で、赤字財政解消の方向付けは当然と認めながらも、上院の削減計画があまりに急激であるのと、削減によって不利益を被るのが社会の弱者である老人や下層階級の人々であることに異議を唱え、反対をしている。

* L-2-1 (2 clauses - synonymous - B)

/...it was Ronald Reagan who ran up the national debt more than all his predecessors put together.

/...it was the Reagan years that got the country into extreme fiscal trouble.

* L-2-2 (3 sentences - synonymous - B & E) + (2 clauses - synonymous - B)

/Should the United States be the only major country without a passenger rail system?

/Do we want to be without an overseas broadcasting service (the Voice of America)..?

/Should we reduce taxes on the rich (//as the House has already voted to do) while drastically cutting benefits for the poor (//as the budget proposals would do)?

この例でも、2 番目の文頭の Do we? を Should we? にしていれば anaphora の完全な parallelism になったのであるが、Lewis はあえて同型になることを避けているのだと思う。なお、三つの文において、主語が、第一の文では the United States, 第二, 第三では we になっていることも注意しておく必要がある。これらはすべて the United States でもよかったはずである。

* L-2-3 (2 phrases - synonymous - B)

In this process we shall be deciding not only /what kind of government but /what kind of country we want.

Lewis の essay では 全般に parallelism の用例はあまり多くない。この essay でも上に見た 3 例だけである。しかし他の形のものを含めれば、repetition の例はもっと多くなり、Lewis もこの修辞法の効果は十分に承知し考慮に入れて書いていると思われる。たとえばこの essay でも、'the poor' というキーワードが何度も使われ、また、この論文の主張点の一つである、予算削減案はクリントン大統領を窮地に追いつめることを目的とした、きわめて政治的な意図に基づくものであるという表現がくり返されている。

* Everything about the budget is political. (Paragraph 5)

* ..the subject is going to be political... (Paragraph 8)

* ..they plainly are on the target list for purely political reason.. (Paragraph 12)

* But then, to repeat, everything is political. (Paragraph 13)

V 結 論

この研究によって明らかにできたことをまとめると次のようになる。

1) 文章の大事な点を強調し印象を深める rhetorical device としての repetition の一種である parallelism の技法は、詩やスピーチほどではないが New York Times の column のような論説文のなかでもかなり使われている。その頻度は、書き手によって、また同じ書き手でも column 毎に異なり一様ではないが、平均2ないし4回である。しかし時には10回前後に及ぶものもある。一方全く見あたらないものもある。

2) 今回の調査対象とした3人の中では、Safire に使用例が一番多く、ついで Rosenthal、そして Lewis の順であった。Safire に多いのは、彼が Nixon 大統領の speech writer を何年かやったことが影響していると考えられる。

3) Lewis に比べて明らかに他の二人に使用回数が多いが、二人が共にユダヤ系であることも関係があるかもしれない。というのは、ヘブライ詩では韻律を格調や脚韻に頼らず、主として parallelism に依っているとされているからである。

4) Parallelism で並置される句、節、文は2箇のくりかえしの場合が、3個以上の場合に対して4対1の割合で多い。そして内容から見た種類としては、synonymous parallelism のケースが、antithetic parallelism のそれに対して、2対1の割合で多い。3個以上のくりかえしの例は、当然、すべて synonymous parallelism である。

5) 句、節、文、ごとの parallelism の頻度は、およそ、2 : 1 : 1.3 の割合である。(これらの割合は16編の column 全体の parallelism の用例の counting に依っている)

今後の課題としては、さらに多くの資料に当たり、上で述べた一応の結論の正否を確かめ、精度の向上を図るための検証を進めたい。また今回は紙数の関係で述べられなかった、句、節、文の parallelism それぞれに見られる多様な pattern、特徴について報告したい。

参考文献

- Brooks, C. & Warren, R. P.: *Modern Rhetoric*, New York, 1972.
Cook, J. S.: *The Elements of Writing and Public Speaking*, New York, 1991.
Fesch, F & Lass, A. H.: *A New Guide to Better Writing*, New York, 1982
Nash, W.: *Rhetoric -The Wit of Persuasion*, Cambridge, USA, 1989
Watkins, F. C. & Dillingham, W. B.: *Practical English Handbook*, Boston, Houghton Mifflin Co., 1988
Akmajian, A. et al.: *Linguistics: Introduction to Language and Communication*, Cambridge, Mass. 1992.
Jordan, L.: *The New York Times Manual of Style and Usage*, New York, 1976

(平成7年12月8日受理)